

梶村秀樹の朝鮮史研究

—— 内在的發展論をめぐって ——

吉 野 誠

一 はじめに

一九六〇年代中葉に書かれた研究入門を再刊するにあたって梶村秀樹は、「全面改稿するより、ちょうど七〇年代が終ったこのさい、原本の体裁をあまりくずさずに早く多くの読者のもとにとどけ」⁽¹⁾ようとするのは、「日韓体制への移行過程であった六〇年代における発想を、いまあらためて確かめておくことが必要な状況があるから」⁽¹⁾なのだと述べている。また、八〇年代半ばにおこなわれた対談のなかでも、「ほとんど信仰に近いような状態でマルクス主義の方法を踏襲しているというような状態から、七〇年代以降には、いささか過剰に、権威の失墜が取沙汰されるといふ時代に入ってきたわけですが、……むしろ権威の失墜が叫ばれるような時代になって、かえって、古典的な枠組がもっている積極的な有効性をきちんと守っていかうとされているようにおみうけます」という対談者の発言を受けて、「七〇年以降……僕からみればどうもわけのわからん冒険の方が主流の形で今日に推移してきて、私などはいっ

のまにかウルトラ保守主義者にされてしまった。六〇年代の問題はもう古い、もう乗り越えた云々というふうにいわれる対象ですが、私は面白いからこの役割を引き受けてみようと思うのです⁽²⁾と語っている。まことに晩年の梶村は、六〇年代の問題意識が風化していく情況に警鐘を鳴らすことを敢えて自らの役割として引受け、頑固なほど意識的に、六〇年代に提起された課題がもつ意義の重要性に注意を喚起する発言をしつづけたように思われる。

日韓条約の締結を画期として本格的に日本資本の再進出が始まる状況のなか、加害者としての自覚に立ち、日本近代の総体とそれに規定されたみずからの存在の根拠を自己否定的に問い直していくこと、いわゆる民族的責任の思想を深化させていこうとするところに、朝鮮史研究における六〇年代の問題意識の核心があった。梶村はこれを「自己点検の契機としての朝鮮史⁽³⁾」と表現し、「日本人自身を明らかにするためにも朝鮮を研究しないわけにはいか⁽⁴⁾ず、「帝国主義的イデオロギーの中にひたっているということを自分自身が意識し自覚し、たえず考える、そういう契機として朝鮮問題はある⁽⁵⁾」のだという。「存立基盤自体への問いかけの契機⁽⁴⁾」となり、「自分が何者であるかを発見させ、何者とならねばならないかを思い知らせてくれ⁽⁵⁾」るのが朝鮮史の勉強であり、「研究する人間の主体が問い返されるようなことが、かならず起こるといような研究のあり方⁽⁶⁾」が追求されねばならないと述べている。五〇年代後半のAAブームは、「アジアに対する手放しの礼賛、日本人民の主体的総括をぬきにしてアジア・アフリカによりかかり、……漠然とアジア・アフリカのナショナリズムに便乗してゆくことが目ざされた⁽⁷⁾」ものであったが、そうした主体性の欠如ゆえに挫折して「ほがらかなアジアのイメージ」が「ガタガタと音を立てて崩れ」、「やっぱりヨーロッパ中心の歴史が正しいんだという古い観念に多くの人が戻ってしま⁽⁸⁾」うような状況におちいつていた。主体的な反省の欠落が朝鮮問題への無関心と不可分の関係にあるという認識にたつて、空白をうめるべくはじめられた六〇年代の朝鮮史研究は、内外の激動の波に洗われながら右のような問題意識を深化させることになったのである⁽⁹⁾。

停滞論・他律性論という近代日本が生み出した否定的な朝鮮観を克服し、新たな朝鮮史像を構築しようとする内在的發展論は、そうした問題意識を具体的な研究に結実させるための方法として提起されたものである。「停滞的な機軸から朝鮮史を見るような価値観……それ自体をひっくり返すことを追及しなければならない。……その基本的価値観にかかわる方法の問題として、私たちは内在的發展という言葉を使えば見つけ出した。解放後、朝鮮の歴史家が自分達の歴史を自由に研究し書きはじめ、そこから私たちは多くの示唆を受ながら僕等なりに、作り出したのがこの言葉に結晶するような歴史への対し方⁽¹⁰⁾であった。梶村は「内在的發展の視角から朝鮮史をとらえかえすという問題意識だけは二〇年間一貫している」と自らを語る一方、「近年この言葉が流布するにつれて多義的に用いられ⁽¹¹⁾」言葉だけがひとり歩きして、その理解に一定の混乱が生じるに至⁽¹²⁾り、それとかかわって朝鮮観の「先祖返り」ともいうべき現象がおこっているという⁽¹³⁾。晩年における危機意識の一端がここに示されているが、いま改めて読みかえしてみると、六〇年代にそれが提起された当初からすでに梶村は、内在的發展論に対する理解が充分でないと繰り返し発言しつづけていたことが知られよう。朝鮮史研究において内在的發展論の再検討が問題になっている今日⁽¹⁴⁾、六〇年代における発想、とりわけその主唱者であった梶村のモチーフを確認しておくことが不可欠の課題のように思われる。本稿では、六〇年代以来の発言を中心に、整理・検討を行なってみる。

二 一 国史的把握と世界史的観点

新しい朝鮮近代史研究の課題を提示した一九六四年の文章の中で梶村は、「歴史は現在もなお、基本的には、独自の権力体系をもつ諸国民の内部的發展の歴史」であり、「一国の歴史が一体としての世界史の法則の中に解消してしま⁽¹⁵⁾ったわけではない」と述べて、一国史的な歴史把握の重要性を強調した。一国史的把握の主張が、内在的發展論の

第一の特質であった。留意しておかねばならないことは、この主張がけっして国際的契機に対する無関心や、世界史的観点への無自覚の産物であったのではないという点である。「ぼくたちは一国史的な観点というものを確立しなければならぬ」ということを一貫して強調してきた。それに対して、朝鮮史以外の方から世界史のなかで位置づけねばならないという批判がある。ぼくたちの朝鮮史についての一国史的な観点というのは、そういう日本人のための世界史像にとって必要不可欠なものと確信していますが、日本史乃至は西洋史研究の機械的延長があつてなかなかのみにんでいただけない⁽¹⁶⁾」といい、また、「近来流行の世界史的条件の重視の必要は私たちも他の分野の研究者以上に痛感しているつもり」だが、朝鮮史研究にあつては「一国史としての内在的發展の論理に執着しないわけにはいかない⁽¹⁷⁾」のだと述べている。周知のとおり六〇年代には日本史研究において国際的契機の重要性が指摘され、また、東アジア世界の有機的連関性への関心が深まっていたのであり、そうした動向と問題意識を共有しながら、なおかつ意識的に強調されたのが一国史的把握の主張だったのである。

朝鮮史において、ことのほか一国史的な観点の必要性が強調されねばならないのは、世界史的観点を重視するといふ「発想を朝鮮史に導入して旧態依然たる他律的『国際葛藤史観』に簡単に癒着させてしまう実例をしばしば目にしている⁽¹⁸⁾」からである。「朝鮮近代史を世界史的連関の中でとらえるという方法は、ある意味では古くから行なわれてきている。むしろ、それだけで『列強の角逐の場としての朝鮮』の歴史を説明できるとされてきた⁽¹⁹⁾」のが実情であり、『世界資本主義の中で一国史を把える』という言葉自体は、ここ最近歴史研究の世界では、わりと流行語の様にさえなっているのです。……それ自体はけっこうなことですが朝鮮史の内在的發展という言葉に対してそういうふんいきの中から『朝鮮一国史主義的な古い方法はだめだ、世界資本主義の視野から捉えなければだめじゃないか』という様な見当ちがいの機械的な議論が出て来たりする。……そういう発想を妙に力んで強調する人が、朝鮮像をどうえがく

かという、簡単に例の他律性史観を展開しはじめる。……あたかも昔の他律性論がそのまま今日、復活してきてしかもそれが進歩的であり、カッコいい事のように流通するという我慢ならない状態さえ起こる⁽²⁰⁾というわけである。朝鮮史研究者が「軽々しく『世界史のなかの朝鮮』を図式化することをさしひかえる態度をとってきた」のは、他律性史観が支配し内在的な歴史展開を追跡しようという視角が確立していない現状において、それが「内容希薄」をもたらす原因となり、旧い朝鮮史像への「先祖返り」に帰結する恐れが強かったからだ、梶村は六〇年代までの研究を総括する文章のなかで述べている。⁽²¹⁾一国史的把握による内在的發展論は、他律性論を克服し新しい朝鮮史研究を進展させるための、いわば戦略的な意味あいをもって主張されたものであったといえよう。

したがって、世界史的な契機をも総合した研究の必要性は当初から自覚されていたのであり、「内在的發展か、世界史か」という「二者択一的」な問題ではなく、「朝鮮を方法的に一国史的にやるといふばあい必然的に外側の世界的状況を捨象しようもないことを前提として」いた⁽²²⁾ことはいうまでもない。「さしあたりいわゆる一国史的・比較史的方法を徹底させるはかなかった」が、「今後は比較史をふまえた関係史、世界史の一環としての朝鮮近代史の意味づけ⁽²³⁾」がなされねばならないことが力説され、「世界資本主義が、東アジアなら東アジアという場でどのように貫いた結果、朝鮮民族の闘争と、日本の侵略の側に加担してしまった大多数の人間の立場とがどう出合ったのか、そしてそれが我々に、どういう歴史的刻印を残しているのか、それを我々はどの様に克服しなくてはならないのかなどのことをやはり世界史全体の中で把え返すこと」⁽²⁴⁾が必要なのだといわれている。梶村にとって内在的發展論とは、あくまでも一国内部の下からの契機、民衆の主體的な営為に即して歴史を把握していくという方法的な観点であり、⁽²⁵⁾それはまた、国際的契機や世界的な歴史展開を把握するための視角でもあったといえることができる。

このように、一国史的把握の主張は、まずなによりも内容豊かな朝鮮史像を創りあげていくために必要な観点とし

て強調されたものであるが、より実践的な問題として梶村の念頭にあったのは、世界史的観点の安易な導入が一国・民族的な契機の軽視につながりがることへの懸念であった。近年の世界システム論などへの厳しい姿勢は、事実認識の問題である以上に、この点と深くかわっていたように思われる。⁽²⁶⁾民衆の日々の生活が一国的な枠組の中に囲い込まれ支配されている現実のもとでは、一国的契機に即して問題を促える努力をおろそかにすると、学問が実践から遊離し、観念的に世界を眺めるだけの知的遊戯に堕しかねない。民族的契機の軽視は、朝鮮民衆が現に直面している諸問題と、そこでの悪戦苦闘の意義を理解する道を見失わせるばかりでなく、とりわけ日本人にとって、民族的責任の思想を深化させるという核心的な問題への努力をあいまいにする結果をもたらすことになる。朝鮮問題に徹することをうじて主体的なアジア観・世界観を確立しようとする民族的責任論にあっては、朝鮮史の独自の位置付けが要請され、したがって「一国史的内在的發展の観点を基礎にすることが、全く正しいと思う。植民地支配の責任の問題が片づいていないということからすれば、そこをどうしても経過しないわけにはいかない⁽²⁷⁾」と述べられるのである。それはまた、観念的で空疎な国際連帯・世界革命論の限界をうち破ると同時に、主体的反省を欠落させた民族主義への安易なもたれかかりを批判する意味をもっていた。一国的・民族的契機をつきつめることによって⁽²⁸⁾はじめて一体としての世界史を展望し、真の国際主義の獲得が可能になるというのが、梶村の基本的な主張であった。一国的枠組がそう簡単に観念の世界のみで越えられるものではなく、今日なお「一国的限界を簡単に、乗り越えたと錯覚しなさんなという姿勢を当分はとらねばなるまい⁽²⁹⁾」のような状況があると、梶村はみていたのである。

三 比較史的方法と近代批判

一国史的把握とともに、梶村の内在的發展論におけるいまひとつの強調点は、普遍的・法則的な把握の必要性であ

った。朝鮮近代史の研究は「外圧によっていかにその法則的展開がゆがめられたか、しかしながら、ゆがめられつなおいかに貫徹しているかを明らかにする」⁽³⁰⁾のが課題であり、「一般的法則は西欧だろうとアジアだろうと基本的に同じ」⁽³¹⁾であって、分析の道具として役立てられるべきだといわれている。この普遍的・法則的把握の主張も、ことさらに特殊性・停滞性のみが言立てられてきた朝鮮史において、それを克服するためにはいくらか強調してもし過ぎることはないのだという、研究を深化させるための戦略的な意図を含んでいた。同時にまた、A Aブームのときのような安易なアジア的特質賛美論が、往々にして特殊性論の裏返しにすぎぬ無責任なロマンチズムに陥りがちなことへの戒めをも含意していた。「アジアにとてつもなく超越的な奇手が法則性を離れて存在するという発想は、一種のエキゾティズムであってそこに生きる人民の苦悩を理解できない」⁽³²⁾のであり、こうしたアジア賛美によっては主体的なアジア観を創出することはできない。かくして、「比較史的発想ととられるかもしれない」⁽³³⁾が、「例えば同じ範ちゅうを指標としながら経済的事実をとらえるということは手続的に抜かせない」⁽³⁴⁾とされるのである。

普遍性にもとづく歴史把握の強調は、梶村にとって、けっして西欧の優位や近代の賛美を意味するものではない。普遍的法則への注意の喚起と同時に、「朝鮮近代史を明らかにするのに、西欧先進国の発展から抽象された図式を念頭におくことはもちろん一応有効な方法ではあるが、それだけですべてが説明しきれるとは到底いえない」⁽³⁵⁾と言い、「矮小化されたいわゆる『比較史的方法』で、『正常な』資本主義発展という美化された基準から、ゆがみを測定して行くことに意味があるのではない」⁽³⁶⁾ことを力説していた。初期においては、「近代とは朝鮮においても、政治・思想・文化など上部構造もふくめて広い意味で資本主義的なものの形成・展開・没落の過程である」⁽³⁷⁾ことを強調する発言が見られるものの、もともと梶村の研究は西欧と同質的な発展の証明自体に眼目をおくものでなく、ましてそれに価値を見出したり、ブルジョアジーの役割に過大な意義を与えたりするのではない。振り返ってみると、すでに日韓闘争

を前後する時期に、歴史的認識をふまえて韓国における資本主義発展の可能性を予見していた人は、皆無とはいわな
 いまでも極めて少数であった。梶村の発言が一貫性を持ちつづけたのは、そうした予見に立ってなおかつ、資本主義
 的近代を批判する観点が明確であったためだと思われる。欧米文明的な近代化をめざす方向が「だめな道なのは、あ
 る意味では決して追いつけないからでもあるが、追いついた途端に空虚さに直面するだけだからでもある」⁽³⁸⁾とのちに
 のべるような見地が梶村の基本的な立場であり、その近代化論批判は、近代化不可能論によるものとは次元を異にし
 ていたというべきであろう。

日本人の朝鮮観をとりあげるに際して梶村は、いわば「善意の」近代化援助論こそが自分たち自身にとって切実な
 問題なのだと強調し、明治期の朝鮮認識に関してもこの点で今日の問題と共通しているがゆえに追究されなければな
 らないのだという。⁽³⁹⁾アジア主義再評価の動きに厳しい姿勢を示したのも、その批判の核心は、「露骨な侵略主義とい
 うものを一方では否定するようになかつたところをとりながら、当面さしあたり『経済援助』という口あたりのいいことば
 を使って、究極的には侵略の方向へ日本の大衆を引き込んでいこうとする……いわゆる近代化路線つまり、『アジア
 の諸国を近代化してあげる、恩恵をほどこすのが日本の役割だ』という形の植民地主義の思想を、権力の方が必要と
 している、そういう時にいわばおあつらえむきに⁽⁴⁰⁾」出てきた点にあった。内田良平ら玄洋社・黒竜会のアジア主義は、
 けっしてアジア的原理にもとづくものなどでなく、「はるかに忠実な、福沢のいう『文明』の使途であった⁽⁴¹⁾」と的確
 に指摘される。金玉均の評価に関しても、大衆的基盤をもたぬエリート主義の限界性以前に、「そのすっきりとした
 近代主義は、そうであるがゆえに、帝国主義に利用され、さらにまきこまれて自主性を否定されてしまっている」こ
 とが、議論の前提となっている。ただし、ここから梶村は、「我々はことばとしてはごく簡単に、近代的価値観の限
 界を言い、実際ロジックとしてそのような限界の認識をぬきにしては、朝鮮の運動のその後の展開もわからないわけ

ですが、それにもかかわらず、帝国主義的支配そのものが、いわば、金玉均に対する積極的評価を朝鮮人に押しつけていることを意識せざるを得ない。その感覚に気付かずに、金玉均の行動はナンセンスだという結論だけを我々は展開してきたので、有効的ではなかったのだ⁽⁴²⁾と述べ、日本人としては朝鮮の研究者が近代主義的な金玉均を評価する歴史的な重みに思いを致さねばならないことを強調するのであり、安直な近代批判の風潮を戒める姿勢をとりつづけたのもこの点に関わっていた。そもそも梶村は自らの問題意識のあり様に関して、A Aブームのころのアジアに対する「非常に透明に近い明るい色彩のイメージ」が「うそっぱばかりであったと思いたくない気持」であり、だからこそその限界を克服し、ヨーロッパ中心主義への逆転という「反動の潮流に逆らおうとして僕なりに朝鮮問題に沈潜してきた⁽⁴³⁾」と回顧するのである。梶村の内在的發展論の理解にあたっては、その根底にある近代批判・近代主義批判のモチーフが、とりわけ留意されるべきもののように思われる。

七〇年代にはいる時点で梶村は、朝鮮近代史のとらえ方に関連して、「社会経済史を精密にたどってゆけばよいのだ」という発想⁽⁴⁴⁾、つまり資本主義の形成と展開をあとづけていけば「いづれは壮大な体系というものができるといふ」発想が「僕たちが『内在的發展』という言葉から最初に引き出した意味」であり、こうした社会経済史主義という偏向に「朝鮮史の研究もおくればせながらその悪しき道を、内在的發展ということばを気づいたとたんにたどろうとした⁽⁴⁵⁾」と語っている。朝鮮近代史は「基本的に朝鮮人民を主体として記述されなければならず、……植民地化へと帰結した状況の中では、朝鮮近代史は、端的には、朝鮮人民の解放闘争史としてあらわれる⁽⁴⁵⁾」のであって、内在的發展は社会経済史の推進よりも人民闘争・民族解放闘争の展開を主軸にして追究されるべきだというわけである。梶村によれば、いわゆるブルジョア民族主義は、もともと社会主義的ではない民族運動の諸潮流を包括する語として暫定的に使用されたもので、かならずしも民族ブルジョアジーを基盤として想定するものでなく、とくに完全植民地朝鮮では

零細農民を中心とする植民地民衆こそがその担い手であった。⁽⁴⁶⁾ ことから梶村の努力は、この民衆の民族主義のなかに資本主義的近代ではなく、「それを超えるべき何らかの非西欧的発展」⁽⁴⁷⁾への志向性をみいだすことに、注がれていたように思われる。とりわけ、一九三〇年代の農民運動のなかにあらわれる「土着的な」社会主義の試みに注目し、そこに「新しい社会」のヴィジョンを志向する民衆の創造的な営為をみようとする。⁽⁴⁸⁾ 民族経済論は、こうした民衆の営みを理解し、説明するための方法・枠組としての意義をもつものであった。普遍的な範疇を用いて説明されるとはいえ、もともとそれは西欧資本主義発達史になぞらえたブルジョア的発展の原基たりうるものではなく、却って地域的な民衆経済のありようの中から近代社会を批判し、非資本主義的な発展の可能性と方向を模索していくための方法的概念として提唱されたものであるといわねばならない。内在的発展とは梶村にとって、「未来へ向けての巨視的長期的な展望の視角としてあるもの」⁽⁴⁹⁾なのであった。

四 む す び

梶村によれば、開港を起点にする東アジアの、日本と朝鮮・中国との両極分解が極点に達した一九三〇年代には、一方で停滞論・他律性論の完成形態ともいうべきものがマルクス主義をも巻き込んでかたちづくられると同時に、他方において朝鮮民衆の民族主義のなかに新しい社会への模索がはじまり、逆分解が開始された。民族経済に依拠した民衆の営為は、解放後の共和国における非資本主義的発展の試みのエネルギーとなり、韓国資本主義の初発の動向を規定しつつ民衆運動にうけつがれていく。⁽⁵⁰⁾ 戦前来の朝鮮観を克服する努力を契機として、それを生み出した日本近代のあり方を自己否定的に把え返し、朝鮮の歴史・民衆を発見することを通じて、分解の構造そのものの止揚をめざす主体を自己創出してゆく、——逆分解の極限状況とみられた六〇年代の朝鮮史研究における課題とはこのようなもの

であったと考えることができ、梶村の内在的發展論のモチーフも、そうした問題状況をふまえて理解されなければならない。共和国における社会主義がかかえる現状の困難性、韓国におけるNICS現象とそれともなう近代化の進展、さらには昨今の世界的激動のなかにあっても、そのモチーフのもつ意義の重要性に基本的な変化はないものと思われる。そうした現象がもたらしている歯止めない自己肯定の風潮のなかで、梶村がいうように、六〇年代の問題意識をあらためてふりかえってみることの必要性が、いつそう強まっているのではなからうか。

以上、梶村の朝鮮史研究を支えたモチーフと考えられるものを、六〇年代から七〇年前後の時期の発言を中心に検討してみた。いうまでもないことだが、これは不勉強な筆者がさしあたって理解のおよんだかぎりで行なった梶村秀樹論の初歩的な試みにすぎない。濃縮された想いが詰まった梶村の文章は多様な解釈の可能性を孕んでおり、その朝鮮近代史像に関しては、多くの人によって、さまざまな角度から検討が加えられるべきである。内在的發展論をめぐる議論を裏あるものにするためにも、梶村のモチーフを再確認しておく作業が必要なこと、本稿の趣旨はこれ以上に出るものではない。⁽⁵²⁾ 根本的な批判を加えるにせよ、積極的な継承を目指すにせよ、梶村の遺産と正面から格闘せずには前に進めないのだということを、あらためて強調しておきたいのである。

〈注〉

- (1) 『朝鮮現代史の手引き』勁草書房、一九八一年二月。
- (2) 「歴史の発展は幻想だろうか」(菅孝行編『モグラ叩き時代のマルキシズム』現代企画室、一九八五年五月)。菅との対談。
- (3) 『排外主義克服のための朝鮮史』青年アジア研究会、一九七一年六月。七〇年一二月の講演をまとめたものである。
- (4) 「日本帝国主義の問題」(『岩波講座日本歴史』二四巻、岩波書店、一九七七年三月)。
- (5) 『朝鮮史——その発展』講談社、一九七七年一〇月。

- (6) 「朝鮮史と日本史の連帯をもとめて」(『歴史公論』五七、一九八〇年八月)。朴慶植・金原左門との座談会。
- (7) 前掲『排外主義克服のための朝鮮史』。
- (8) 「アジアと私」(『アジア・日本そして私』神奈川大学二部梶村ゼミナール、一九七七年三月)。「やはり六五年前後の時期になると完全にA・Aよりかかりのイメージがくずれていたといえましょう。……つまり戦前の発想の残り物でまに合せてきた五〇年ごろまで、それからあと甘いアジア・ブームで何とか糊塗してきた六〇年代初めまで、それからあと、日韓条約を経て現実の日本帝国主義体制―新植民地主義体制が、我々の上に、日常食うもの、着るものなど全ての上に、影を落しているなかでもがいてきて現在に至っている」(前掲『排外主義克服のための朝鮮史』と六〇年代をふりかえっている)。
- (9) 前掲『排外主義克服のための朝鮮史』、同「アジアと私」および「朝鮮史研究の方法をめぐって」(『自主講座朝鮮論』四、一九七四年一二月)など参照。なお、梶村が朝鮮史とのかかわりについて自ら語ったものには、右記のほか、「私の反省」(『朝鮮研究』八九、一九六九年一〇月)や「朝鮮との出会い」(『季刊まだん』四、一九七四年八月)などがある。
- (10) 前掲『排外主義克服のための朝鮮史』。
- (11) 『朝鮮史の枠組と思想』研文出版、一九八二年四月。
- (12) 「朝鮮近代史研究における内在的發展の視角」(勝維藻ほか編『東アジア世界史探究』汲古書院、一九八六年一二月)。
- (13) 「ぼくらが結論的にいっていることにたいして、それは陳腐な意見である、もっと斬新な発想をといながら、逆にむしろ先祖がえりするような発想のなかに状況を突破する新しい手がかりを求めることを考えたりしてしまう。われわれからみるとちょっと危ないものが、若い人たちのなかにあるような気がします」(前掲「朝鮮史と日本史の連帯をもとめて」)、「特にここ一、二年、なぜか朝鮮観の先祖帰りとでもいうべき現象に出会うことが多くなっており、ことさらに平凡なことを再確認することがとりわけ重要と思われるのである」(『植民地支配者の朝鮮観』『季刊三千里』二五、一九八一年二月)等々と述べ、この前後から同様の発言が繰り返えされている。
- (14) 内在的發展論に関しては、吉野誠「朝鮮史研究における内在的發展論」(『東海大学紀要文学部』四七、一九八七年九月)を参照。梶村に言わせれば、さしずめ「ひとり歩き」した内在的發展論を批判の俎上にのせたものにすぎぬ、ということになるだろう。
- (15) 「朝鮮近代史の若干の問題」(『歴史学研究』二八八、一九六四年五月)。
- (16) 「日本と朝鮮」(『朝鮮研究』八〇、一九六八年一二月)。日本朝鮮研究所でのシンポジウム「日本における朝鮮研究の蓄積」。

をいかに継承するか(13)」での発言。

(17) 「朝鮮社会の歴史的發展」(『歴史学研究』三三二、一九六七年二月)。

(18) 同右。

(19) 前掲「朝鮮近代史の若干の問題」。

(20) 前掲『排外主義克服のための朝鮮史』。

(21) 「日本におけるアジア・アフリカ・ラテンアメリカ研究——朝鮮」(『アジア経済』一〇〇、一九六九年七月)。

(22) 前掲「日本と朝鮮」。

(23) 「朝鮮近代史研究の当面の状況」(『中国近代史研究会会報』九、一九六八年五月)。

(24) 前掲『排外主義克服のための朝鮮史』。

(25) 「内から下からの契機、基層民衆の主体的条件の解明を究極目標としてみすえつつ、矛盾の推転過程そのものをできるだけ事実即して具体的に明らかにしようとする」のが、内在的發展論だとのちに整理している(前掲「朝鮮近代史研究における内在的發展の視角」)。

(26) 「一般的な朝鮮蔑視・民族差別の社会意識、学問的にも戦前からの固定的シエーマの無自覚的な残存という素地があるところへ、最近では、一見斬新な『世界史の理論』が機械的に導入されてきてこれと癒着することにより、内在的契機を軽率に無視する姿勢が正当化されるような状況が進展してきている」(同右)、「世界システムをどういうふうに説き明かすかというときに……実践的契機が暗に背景にあるのとは違って、実践的契機から離れて世界を鳥瞰図式に眺めるといふふうになっってしまった。その意味で、一国的な問題をきちんとやろうということすらできなくて、それよりましなつもりで、もっと雑ばくに、世界革命を空疎に語るといふのと同じ様な意味で世界を語っていて、日本にもそれが流行ってきた」(前掲「歴史の発展は幻想だろうか」といふ。「各国人民の課題も、まずは一国的枠組の中に主軸がある」ようななかでは、「一国の枠組の中で、人民がどう生きていくのか」といふことを抜きに、世界を語ることはいえない」といふわけである)。

(27) 前掲「日本と朝鮮」。「そもそも世界史的視点、東アジアという問題のたて方を要求した現代的課題とはいったいどういう意味をもって強調されたのだったか」といふ姿勢論のレベルにたちもどって、根本的に再検討」(『日本史教科書における排外主義』『朝鮮研究』八七、一九六九年七月)すべきであり、民族独善主義への反省から生れたはずの東アジア世界論が、朝鮮史の自律性の軽視や奇妙なかたちの日本中心主義に帰結していると批判する。かくして、「朝鮮人だったならば、一国史

ということだけ言っているのではなくて、丁度日本人の日本史をやっている人と同じような自国史に対する問題意識、もっと必要なんじゃないかという気がします。それに対して、むしろ日本人の方こそが、一国的な内在的發展性を朝鮮についてはいっそう強調する方法的観点にたつ必要がある」（『日本と朝鮮』）というわけである。

- (28) 「一国的内在的發展の視角を徹底させることを通じて一体の世界史をはるかに展望していくことが当面の必要事」（前掲「朝鮮近代史研究における内在的發展の視角」）だという。梶村はまた、竹島問題の検討に際して、「領土観や国家意識自体がいずれ止揚されるべものだとする一般論から出発するのでなく」「事実考証の面倒を避けず、現実の中で是非を正し、一つ一つ問題をつぶしていく以外にない。その作業が完成してはじめて国境は意味をもたなくなるのである。現実と離れた抽象観念の世界で、領土意識や国家意識の克服をうそぶいてみても、どうということはない」（『竹島』）独島問題と日本国家「朝鮮研究」一八二、一九七八年九月）と強調している。より実践的な問題としては、「周辺部民衆の主體的営為としての世界資本主義への総反乱、ないし世界資本主義からの離脱過程が進行せざるをえない」（『旧植民地社会構成体論』）『発展途上経済の研究』世界書院、一九八一年七月）、「第三世界各国人民は、世界資本主義の全面崩壊を待つ以外に解放の道がないわけではなく、世界資本主義体制からの一国的相対的離脱の権利と可能性をも確かに保有している」（前掲「朝鮮近代史研究における内在的發展の視角」）といった、戦略的な見通しともかわっているというべきだろうか。

- (29) 前掲「歴史の発展は幻想だろうか」。

- (30) 前掲「朝鮮近代史の若干の問題」。

- (31) 前掲「日本と朝鮮」。

- (32) 同右。

- (33) 「朝鮮近代史と金玉均の評価」（『思想』五〇一、一九六六年二月、『朝鮮史の枠組と思想』に再録）。

- (34) 前掲「日本と朝鮮」。

- (35) 渡部学編『朝鮮近代史』勁草書房、一九六八年三月。

- (36) 前掲「朝鮮近代史研究の当面の状況」。

- (37) 前掲「朝鮮社会の歴史的發展」（『歴史学研究』三二二、一九六七年二月）。

- (38) 「『やぶにらみ』の周辺文明論」（『山本新研究』七、一九八五年四月）。

- (39) 「最近では、むしろ主観的には独占資本の立場と自己を区別する側からさえ……可能な援助の手をさしのべるべきである

という『善意』の主張がなされるに至っている。我々は、このような状況が、段階の相違にもかかわらず、局面として明治前半期の状況とよく似ていることに気づく（前掲「朝鮮近代史の若干の問題」）云々。「現代帝国主義イデオロギーは周知の近代化論という形式で、ある種の『反省』『同情』をもそのなかに組みこむべく大きく網をうってきて」（前掲「朝鮮近代史研究の当面の状況」）いる情況のなかで、「自分をせこにおいて」「ひとごとのように」「日本人の朝鮮観」を論断する客観主義的なやりかたでは、これに抗した主体的な朝鮮観を創出しえないという。

(40) 前掲『排外主義克服のための朝鮮史』。

(41) 「竹内好氏の『アジア主義の展望』の一解釈」（『中国近代思想研究会会報』三七、一九六四年四月）。もともと近代文明主義である内田らの「アジア主義」からは、近代化論をのりこえる契機などつかみえないのであり、具体的な内容ぬきにアジア的なものを安易に称揚すると、こうした陥穽におちいりやすいという実例でもある。ただし、「当時の竹内好さんは思想的な良心をかけてそのような発言をされたと思います」「竹内好氏は少なくとも所説を今は撤回されているんじゃないかと思います」（『排外主義克服のための朝鮮史』）、「竹内好氏をはじめとする若干の中国研究者が、日本人のアジアに対する責任の問題に固執してきた」（『東アジアと中国』『講座現代中国』一、大修館書店、一九六九年七月、『朝鮮史の枠組と思想』に再録）等々の言い方のなかに、竹内のモチーフそのものへの深いところでの共感を読みとるべきだろう。

(42) 『朝鮮民族解放闘争史と国際共産主義運動』青年アジア研究会、一九七一年二月。金玉均らの開化思想に対し、「農民意識の集団的合成物」たる東学については、「朝鮮民衆がオリジナルにつくり出した『近代』のための運動であって、それ以上でもそれ以下でもなかった」とし、天道教が今日ほとんど影響力を失っているのは「きわめてゆがめられた境界線分断国家というあり方ながら『近代』がそこにすでに実現されており、民衆はその『近代』の矛盾・重圧とこそ向かいあっていることのあらわれ」だという。そして、「初期東学は、一進会的なコースと民族主義運動に徹していく部分との、両極端の可能性をはらんで」おり、「そこに『開化』の可能性があるようにみえたために、最も危険な外来侵略者日本に接近し、その内部から一進会を生み出すにいたる」と指摘されている。なお、「今日において近代史をとらえかえす視点として、植民地支配下をも基層において貫流して『近代』を止揚する可能性にまで到達するような民衆レベルでの思想的内在発展」（姜在彦『朝鮮の開化思想』書評『歴史学研究』四九七、一九八一年一〇月）を追究することが必要だと、のちに述べている。

(43) 前掲「アジアと私」。「前後の明るいイメージと逆転した暗い複雑なイメージという、いずれも表面的に言えば、事実としてある二つのものを統一してつかむため」朝鮮問題に徹し、民族的責任の思想をふまえた主体的なアジア認識をもつことが

不可欠となるのである。

(44) 前掲『排外主義克服のための朝鮮史』。六〇年代に自らがたどった研究の軌跡をふりかえって、朝鮮史への認識の欠落をうめるべく侵略史の暴露に力点のあった段階から、内在的な発展の事実の追跡に力を入れる段階にすすんだが、社会経済史主義的な偏向をもつ「この段階で描いた朝鮮史のイメージは、事実離れしていたわけではないが、あまりにロマンチックであり、そのために美しくはあるが、もろさを含んで」いて、「『すばらしい純粋朝鮮』を描くあまり、奪われたものを奪回しようとする朝鮮人の苦しみを通じた筋金入りの強さというものを捨棄して、いわば客観主義的ないしきれいだとのきらいがあった」という（前掲「朝鮮史研究の方法をめぐって」）。かくして、二つの段階をふまえ、民族的責任の思想に支えられた「朝鮮民衆の内在的発展」の解明、「現実の植民地権力との抗争……血みどろの努力、そこから学ぶべきものを自分でひき出してくる中で私達の方の思考過程が触発されていく」ような研究が自覚的に追究されることになる。金嬉老裁判へのかかわりとともにこうした転換の契機となった『朝鮮研究』における差別発言問題については、前掲「私の反省」など参照。

(45) 前掲『朝鮮近代史』。「朝鮮人民の闘争をあくまで中心に据えながら、その客観的条件としての社会経済史的要因がどのように人民の闘争を条件付けたのかにもつねに大きな注意を払う形で、両者を統一させなければならない」（前掲『朝鮮民族解放闘争史と国際共産主義運動』）。のちにまた、「植民地化という状況のなかで、朝鮮人民の内在的発展の最良の精華は、社会経済的発展の推進よりも、民族解放闘争の中にあらわれているということがある以上、その意味での政治史・思想史的観点が一般的なケース以上にいっそう重要であろう」（前掲『朝鮮における資本主義の形成と展開』序章）と述べている。

(46) 『『民族資本』と『隷属資本』』（同右書）。

(47) 「東アジア地域における帝国主義体制への移行」（前掲『発展途上経済の研究』）。

(48) 「朝鮮民衆の一九三〇年代」（『世界』四二一、一九八〇年二月、『朝鮮史の枠組と思想』に再録）、「一九二〇～三〇年代の民衆運動」（旗田巍ほか編『朝鮮の近代史と日本』大和書房、一九八七年五月）など参照。

(49) 前掲「朝鮮近代史研究における内在的発展の視角」。

(50) 前掲「東アジアと中国」、同「朝鮮近代史研究の当面の状況」、同「朝鮮民衆の一九三〇年代」など参照。

(51) 吉野誠「梶村さんの頑固さと柔軟性」（梶村秀樹著作集刊行委員会編『回想と遺文』明石書店、一九九〇年五月）参照。

(52) 六〇年代の問題意識を再確認することの必要性という梶村の発言に即して、本稿での検討は、もっぱら梶村のモチーフの不変性・一貫性という側面からのものであった。真理とはすぐれて状況的なものであるということを深く認識し、また、状

況に対する発言こそを心掛けていたのが梶村であったのだから、朝鮮をとりまく歴史的状況の変動のなかにあって、当然のことながら梶村の朝鮮史研究にも変化・発展がある。その画期というべきものも、いくつかみとめられる。そうした問題もふくめて、具体的な朝鮮近代史像の検討は別稿にゆずりたい。